

仙台教区サポートセンター

福島デスクニュース

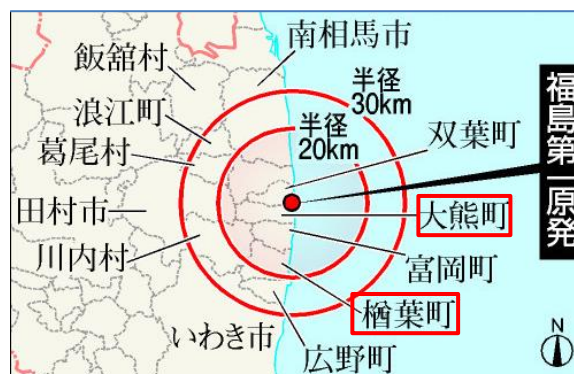
第19号 2015年11月

作成:仙台教区サポートセンター福島デスク
〒975-0001
福島県南相馬市原町区大町 2-197
fukushima.desk@gmail.com
Tel/Fax 0244-32-1531
080-5872-4447
<http://fukushimadesk.blogspot.jp/>

楡葉町の蕎麦屋 「東電に人生の夢を壊された」

東京電力・福島第一原発が立地する大熊町は「帰還困難区域」、一方、楡葉町は9月5日に全域「避難指示」が解除されました。避難指示の解除は補償の打切りを意味します。仮設住宅や借上げ住宅の供与期間の問題等もあり、帰還を望まない人にも帰還への圧力を高めることとなります。

いわきサポートステーション「もみの木」は、大熊町と楡葉町のいわき市にある仮設住宅10カ所を、それぞれ月に二回「出張交流カフェ」としてコーヒーサービスの訪問をしています。



避難指示解除から1カ月が過ぎた楡葉町は10月21日、町内に生活拠点を移した町民が、20日現在で203世帯321人とどまると発表しました。これは、全住民2694世帯7368人の約4パーセントで、住民帰還が進んでいないことが分かります。

先日、「もみの木」の仮設住宅訪問の際、震災前、楡葉町で蕎麦屋を開いていた方の話を聞きました。「東京で修業し、故郷楡葉に帰り蕎麦屋を開いたものの、今回の原発事故によって店の再開をあきらめざるを得なくなった。全町民の3～4パーセントしか帰町しない現状で、地域の水源地への不安も抱きながら、自分の蕎麦を自信を持って客に出すことは出来ない。故郷への恩返し気持で店を持ち、お客さんにも可愛がって貰っていたが、やむなく首都圏に物件を探す決心をした。私は『東電に人生の夢を壊された』。悔しさでいっぱいです。」と話してくれました。

蕎麦職人と自称 そば通の、ソバ談義。旅の途上で



楡葉町 天神岬スポーツ公園から太平洋を臨む

楡葉の蕎麦屋さんに出会ったその日も、いつもの様な仮設住宅談話室でのカフェでした。リーダー的な方が、50代後半とおぼしき男性を私に紹介し、その方の打つ蕎麦の美味しさをPRしたのです。その方Yさんの名刺には「江戸、東京そばの会」と書かれていました。『そば通』を発行された会でしょうか、と尋ねますと、果たして、そのとおり。「私、その本持ってますよ！「ソムリエ」ならぬ「ソバリエ」を認定するような方々の会でしょ！」決して発行部数も多くない、その本を、私が持っていることで、Yさんの表情は一気に和み、打ち解けた話をし始めたのです。

おまけに、何人かの仲間と、その本を頼りに東京・葛飾の「京成立石」にある、こだわりの蕎麦屋に行ったことがある、と伝えると、やおら、もう一枚の名刺をお出しになり、その店『玄庵』こそが、Yさんが再起のための修行をされ、また、Yさんを励まし続けてくれた店だと言うのです。蕎麦店の営業の叶わない現在、Yさんは蕎麦マイスターとして、『玄庵』さんへのお礼の気持ちも込めて、プロコースの指導者として活躍されているのだそうです。

これには、私も驚きました。職場の仲間と春・秋に「文学散歩」という名目で、作品にゆかりのある町を訪ねては、その町で飲み歩くという遊びをしていたのです。今から7、8年も前に、埼玉の地方都市・熊谷の人間が、わざわざ東京の「京成立石」の蕎麦屋に出掛け、その店で蕎麦を打っていた方が今回の原発事故で避難を余儀なくされている楢葉町の仮設住宅を訪問し、その談話室の出張カフェで出会って、「今」を話し合うことが起ころうとは。「神様、ソバにいらっしやっただのかな？」という出会いでした。(いわきサポートステーション「もみの木」 朝尾光二)

楢葉町 住民帰還 4% 3・11は「原発災害」記念の日

2011年3月11日、福島県の浜通りの市町村では、地震から3分後、午後2時49分に発表された大津波警報の対応に追われた。楢葉町では地区ごとの住民参加で津波のハザードマップを作成していた。防災無線で呼びかけ、消防団、防災課の広報車は避難誘導のため沿岸部へ向かい、役場職員は戸別に避難の声掛けをした。同日午後7時3分、政府は「原子力非常事態宣言」を発する。ここから、福島特有の「原発災害」への対応のスタートとなる。

原発立地4町（第一原発：大熊町・双葉町、第二原発：楢葉町・富岡町）には、東京電力の社員が派遣され、不十分ながらも原発の状況が刻一刻ともたらされていた。ただし、情報が持つ意味を正確に理解していた役場は限られていた。楢葉町には、長年原発を担当していた職員がいて、

東電からの情報の先を予測し、国の避難指示が出る前、3月12日午前8時に「全町避難指示」という判断を下した。

昨年5月、楢葉町は2015年春以降の住民帰還を表明した。昨年5月27日現在、人口は7499人、いわき市へは、県内避難者6462人の89.3%を占める5772人が避難していた。

一方、当時、いわき市では将来の人口縮小を見越した施策を講じていた。震災後、津波被災のいわき市民への対応に追われる中、双葉郡などから約2万4千人の避難者、除染・廃炉作業員が流入した。医療従事者の不足、宅地需要の増加、地価の高騰、焼却ごみの発生量の増加など、様々な影響を及ぼしている。(今井照著『自治体再建』、福島民報 2014/5/30、「いわき市・双葉地方町村会 政府への要望書」参照)

